三条市立大の目玉課程　産学連携実習

滑り出し上々 実践の学び

News コンパス

ものづくり 喜びを重視

三条市立大（三条市上須頃）が目玉カリキュラムとしている「産学連携実習」が先月スタートした。地元企業に長期間学生が入り、実践を通じて学びを深める取り組みで、開学2年目の同大で初の試み。地域全体をキャンパスに見立てた、新設大学の新たなチャレンジだが、協力企業、大学ともに「出だしは順調」と評価している。

（三条総局・籾山朗）

同大は燕三条地域の120社以上と協力関係を結び、2年次に3社で各2週間、3年次に1社で16週間の連携実習をする。学問的な知識と実社会で得た経験を、相乗効果で発展させていくことを狙う。

金属加工や機械製作、鍛冶といった幅広い分野、BtoB（企業間取引）やBtoC（企業対消費者取引）など多様な業態の企業が受け入れ先となっており、同大が学生の希望を聞いた上でマッチングする。

■　■

意欲湧く学生 企業にも刺激

2年の中屋輝空（きらく）さん(19)は10月中旬、プレス加工や組み立てなどを手がける「齋鐵（さいてつ）」（同市井戸場）で、ファンヒーターの製造に当たった。遮熱板や燃焼ファンなど、完成させた部品は他社の工場で製品に組み立てられ、全国で販売される。中屋さんは「自分が作ったものが誰かの役に立つのはうれしい」と目を輝かせる。

子どもの頃から工作が好きだったという中屋さんは長野市の出身。進路に悩んでいた頃「経営も含め、さまざまなものづくりの現場に触れることができる」と聞き、同大への進学を決めた。

齋鐵のほか、包丁や測定機器のメーカーを実習先に選択した。「働くのは大変だが、学ぶ意欲が湧く。実習で得た経験と大学で学ぶことを踏まえ、3年生の時にどこで実習するか、じっくりと考えたい」と充実した表情を見せた。

■　■

齋鐵は中屋さんを含め4人の学生を受け入れた。齋藤孝之輔社長(54)は「どの学生も非常に積極的で学習意欲が高い。一人でも多く地元に魅力を感じて残ってほしい」と期待を隠さない。

協力企業のうち、これまでインターンシップ（就業体験）などの経験がないところが半数を超えるという。齋鐵も初めての学生受け入れで、実習計画の作成は手探り状態。最終的には「ものづくりの楽しさ」に主眼を置き、各工程を経験して製品を完成させることを重視した日程を組んだ。

一方で、齋藤社長は「燕三条はものづくりの集積地だが、最終製品を作らないため知名度の低い会社も多い」と指摘する。「優秀な学生に入社してもらうためには、自社の魅力をどう伝えるかを考えざるを得ない。実習をきっかけに、各企業とも対外的にPRする力が向上するのではないか」と波及効果にも期待する。

■　■

同大の産学連携実習委員会の委員長を務める茨木正一教授(62)は「まずは順調な出だし」と評価する。「企業にとっては学生の意見が刺激となり、学生にとっては、自分が大学で学んだことが社会で通用している実感があるようだ」と手応えを話す。

その上で「来年からの長期間の実習が本番」と話す。3年次の連携実習では、学生と企業が話し合って課題を設定し、解決することを目指す。「大学側も協力企業の特徴を把握し、より丁寧な意思疎通を図ることが不可欠だ」と強調する。

今後の課題として、優秀な人材の供給や大学との共同開発などを挙げており、「数年間で結果を残していくことが重要になる」と気を引き締めている。

ファンヒーターの部品を製作する中屋輝空さん＝三条市井戸場

新潟日報　2022年10月28日（金）朝刊